

国内最大の革製品コンテスト

ジャパン レザーアワード 2026

〔受賞・入賞作品ブック〕

Japan Leather Award 2026

Japan Leather Award 2026

ジャパンレザーアワード2026 入賞作品

19年目の開催を迎えた「ジャパンレザーアワード2026」。
全国から多彩な作品が集まる、日本最大の革製品コンテスト。
今年も数多くの応募作品の中から、
厳正な審査を経て59点が入賞作品に選ばれた。
伝統の技を生かしたものから、斬新な発想が光るものまで。
そこには、革の魅力を引き出す創意工夫と、
ものづくりへの情熱が息づいている。
革の新たな可能性を感じさせる59作品を紹介しよう。



三上 良弘さん

手で考える靴 ― 織部

株式会社ネーカーズ



池田 崇さん

革ぞうり

株式会社革人



森 直美さん

870（PIG本革七宝柄型押し）
雪駄サンダル

株式会社HARU



FUMOTO 参乃麓さん

日本伝統 “水引結び” 細工

個人



北嶋 浩治さん

まほろばサボ
【たつの蝋引きレザー】

北嶋製靴工業所



北嶋 浩治さん

5cmヒールアップ
グルカサンダル

北嶋製靴工業所



長田 ちひろさん

Ka・Bu・Ki・Mo・No

Bottega TraModa



永桶 拓郎さん

熊革マウンテンブーツ

個人



金守 剛志さん

The Cavalier

SUNDY SHOEMAKER



佐藤 周平さん

選べるレザーバッグ

エース株式会社



伊藤 拓さん

麻葉 | ASANOHA

革工房Taku



奥出 宏二さん

CRÈME crayon（クレム クレヨン）
No.9001

有限会社モンテローザ



吉田 義彦さん 石原 和幸さん

愛知県の黒毛和牛から製品まで
一貫生産・地産地商の
『あいちレザー・リュックトート』

名古屋バッグ協同組合
あいちレザーものづくりプロジェクト



高橋 幹大さん

ボストンバッグ

個人



太田 遼さん

HIDE

個人



福島 ゆかこさん

鹿皮紙（黒）バッグ

shujiworks手縫い革教室



福岡 靖洋さん

デコブランシェ スクエアバッグ

株式会社まるふく商店



古田 光さん

Dullesbag “Noe”

フルタカバン



中田 舞さん

鹿革ストリングバッグ

株式会社鞄工房山本



松村 美咲さん

Gemma

有限会社清川商店



天野 英一郎さん

kawa-pluie

ASAKUSA革百貨店



田中 章夫さん

革ジャンパー

角館の革館



森 直之さん

Ollet-J

ルボア株式会社



矢野 悟さん

シームレスコンパクト長財布
enzima long（エンジーマロング）

株式会社バンビ



筧 裕正さん

和菓子の木型で作った
丸鯛パスケース

個人



小川 陽生さん

がまぐち名刺ケース

GNUOYP（ニュピ）



伊藤 拓さん

灯の実 | Akari no Mi

革工房Taku



西 洋樹さん

革べこ

BAIHU



カワダ シュウジさん

鹿皮紙のペンダントライト&
スタンド

shujiworks手縫い革教室



廣野 航平さん

レザーキーキャップ

yuitsu（唯一）



小嶋 英揮さん

歩く、即、猫。

個人



瀧本 武さん

SPLIT EASE

~Tomokita~



木下 実さん

roses

課題商店



加藤 友樹さん

友禅足袋シューズ
SUUTA SUUTA

有限会社T.M.Y's & 株式会社ワザビ



園田 尚生さん

Trick or Pumpkin

靴工房Ellgon



紀井 長さん

REshuse32
[LEATHER SHOES × SNEAKER]

個人



大島 康弘さん

着る革靴

grandisola



岡田 憲樹さん

ハイノウサウルス

株式会社村瀬鞄行



内田 成彦さん

酒呑大蛇（しゅてんおろち）

湯宿草菴souanstyle



和田 綾乃さん

夏の日

株式会社猪瀬



末永 るみえさん

OMAGATOKI Hand bag

Suenaga Design Studio



泉 了介さん

『虎』

個人



森 健さん

3Wayダレスバック24

Mori Factory



椎名 賢さん

Blacks

Ken Shiina Design Laboratory



堀井 誠さん

「ひとはだ」

まこと工房 & 有限会社T.M.Y's



小坂 美順さん

STAY WILD

個人



野沢 浩道さん

《KUROMUJI》

個人



伊藤 拓さん

森守 | Morigami

革工房Taku



稲葉 悠さん

【継海】---サメ革琉球三線---

RYUKYU SHARK



木下 実さん

BEND

課題商店



村田 真一さん

A-side：革という画材 /
B-side：命の残像

monomial-yesnos



蔡 弘灝さん

神農

CAI芸術スタジオ株式会社



鈴木 忍さん

レザー・ポップアップ・
インテリア

個人



ウエダ トモユキさん

Percussion Resonance

TOMOWORKS



栗生 新依菜さん

deerskin

兵庫県立姫路工業高等学校



溝上 心晴さん

錦恋

兵庫県立姫路工業高等学校



今村 吏希さん

LEATHER CELL VEST
（レザーセルベスト）

文化服装学院



松井 咲楽さん

presence

上田安子服飾専門学校

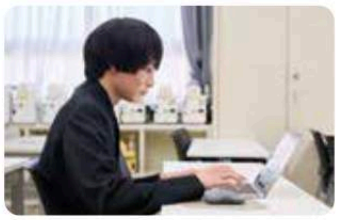


杉森 旭さん

camouflage chair

奈良芸術短期大学

受賞作品詳細は
こちらへ



Profile

今村 吏希さん

Affiliation

文化服装学院

文化服装学院・服飾専門課程・服装科2年生。
幼少期よりものづくりにのめりこむ。中学卒業後、高等専門学校に進学。
環境生命コースに在籍し、化学と生物科学を学ぶ。
このころよりファッションに興味を持ち、現在在籍する文化服装学院へと進学する。

受賞者動画を配信中！

作者提供 3Dプリント用データ

六角形パーツと極薄羊革の融合

「一般的な衣服は、材料を裁断し、縫製して仕立てるので、部分的な修理や形状の変更が難しいですよね。その課題をどうにか解消したいと考えたのが、今回の作品です」

学生部門最優秀賞にして、全部門の応募作品の中からグランプリにも選ばれた今村吏希さんは、作品が生まれた背景をそう話す。「LEATHER CELL VEST（レザーセルベスト）」という名の通り、3Dプリンターで作成した小さなパーツ＝CELL（共通規格化された最小単位）を連結させることで、一着のベストに仕上げている。

「使用した六角形のパーツは、334個。それらを、同じく3Dプリンターで作成した三角形のジョイントパーツでつなぎ合わせています。素材には、植物由来のバイオマスプラスチックである、PLA（ポリ乳酸）を採用。作品の土台となる構造に必要な剛性や強度を持たせるため、硬さのあるこの素材を選びました」

今回初めて取り組む構造だったということもあり、まずはこの方法できちんとベストの形として成立するかを検証。その際に、「着脱のしやすさ」と「着用時の安定性」、この二点をいかに両立させるかが、非常に難しかったと今村さんは話す。

「ちょうどいいバランスを探るために、何度も試作を重ねました」

そして、おもしろいのは前身頃の開き方。開閉部の左右にマグネットが仕込んであり、ここが前開きのつなぎ目になっているとは、閉じているときはまるでわからない。

「パーツの連続性を保ちたかったので、この構造にしました。スナップなど余計な部品を加えたら、せっかくの六角形のつながりが崩れてしまうと思ったからです」

ベスト本体の構造ができあがったところで、デザインの主役となる革を融合させていく。構造に使ったのと同じ六角形のパネルを3Dプリントし、そこに、端を巻き込むようにして革を貼り付ける。こうしてできた部材を、ベスト本体の六角形パーツの上に接着している。

「選んだのは、0.3mm厚のシープレザー（羊革）です。均一に六角形が並ぶことで美しいフォルムが完成する本作では、パーツのきれいな角を出すことが必須。そのためには、薄さのほかに、貼り付け作業時の伸縮性や柔軟性も重要なポイントでした」

加えて、ファッション性があること。機能的で丈夫であること。そんな条件を満たすのが、革という素材であり、極薄のシープレザーだった。





Japan Leather Award 2026

GRAND PRIX

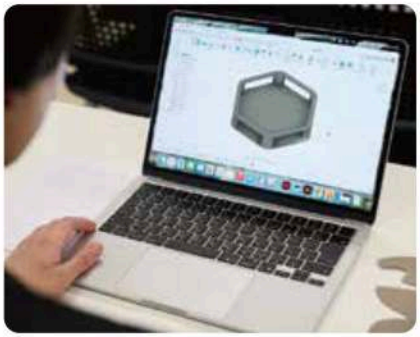
学生部門
最優秀賞

構造から発想を転換
部分的修理も可能な
新時代の革ベスト

Title
[LEATHER CELL VEST（レザーセルベスト）]

Design

製図作業をおこなうソフトウェアであるCADを使って、六角形パーツを設計。連結に使うジョイント部分のパーツも同じように設計していく。「着脱のしやすさ」と「着用時の安定性」を両立させるため、完成までには何度も試作を重ねたという。



Structure

六角形のパーツは、全部で334個を使用。これを、三角形のジョイントパーツを使って連結させていく。「3Dプリンターを使えば、デジタルデータに基づいて規格を揃えたパーツが繰り返し製造可能。そのため、一度設計が決まってしまえば、組み立てる作業はスムーズです」



Material

デザインの主役となる革には、0.3mm厚のシープレザー（羊革）をセレクト。3Dプリントした六角形パーツに、端を巻き込むようにして貼り付けていく。角をきれいに出すために求めたのは、薄さ、伸縮性、柔軟性。その条件にぴったり合致したのが、このシープレザーだった。





連続する六角形パーツのデザイン性を損なわない、マグネット式の開閉部

「デジタルの技術と、古くから人間の暮らしと共にある天然素材。この対比があるからこそ生み出せるインパクトがあると考えました」

レザーは動物由来であるため、個体差があり、また一枚の革のなかでも表情が違う。しかしそれこそが本作で生きていると、今村さんは言う。

「着ている人の動きに伴ってパーツも動き、光の当たり方が変わります。すると、革の表面にあるシボ（細かな凹凸）、シワなどで、見え方が変わるのがおもしろいんです」

高校生になり ファッションに興味

幼少期から創作活動が好きだったという今村さん。中学生になると、将来はメーカー企業の研究開発者になりたいと思うようになり、高等専門学校に進学。環境生命コースで化学と生物科学を学んだ。当初の目論見としては、高等専門学校卒業後に大学に編入しようと考えていたが、実際には、現在在籍する文化服装学院へと進む。

「高校生って、ファッションにはまる時期じゃないですか。もともとものづくりが好きだったし、服をつくるのもいいかなって。それで、文化服装学院に入学しました。現在は、服飾専門課程・服装科の2年生です」

3Dプリンターを使い始めたのは、意外にも今年（2026年）の4月だという。

「自宅でも製作をしたいと考えたときに、大掛かりな設備をそろえるのは、予算的にもスペース的にも厳しい。パソコン1台とプリンターさえあれば創作活動ができるという点で、3Dプリンターは魅力的でした」



「パーツを小さくすれば、衣服自体の柔軟性を上げることも可能」と今村さん

また3Dプリントを活用する理由は、造形の自由度やデザイン性だけではないと今村さん。必要な部品を必要なときに必要な数だけ製作できることに加えて、設計データを他者と共有すれば誰もが製作に参加できるなど、メリットは多岐にわたると話す。

「今回の受賞作品で使用したパーツの3Dデータも、GitHub*を通じて公開しています。単に完成した作品を見てもらうだけでなく、多くの人に設計データにアクセスしてもらうことで、作品の構造や3Dプリントによるものづくりを身近に感じてもらいたいと考えています」

製作で直面した課題を解決したい

目下の取り組みは、高等専門学校で学んだ工学的なアプローチを使った、ファッション分野における新しい提案だ。

「たとえば従来の服づくりでは、型紙に沿って生地を裁断する工程が欠かせませんよね。でも、型紙の形状を3Dデータ化し、3Dプリントによって様々なテキスタイル構造を直接造形してしまえば、裁断工程を省略することができます」

また、その3Dデータ化を簡略化するソフトウェアの開発や、テキスタイル構造の開発も並行しておこなっているという。

「僕のものづくりの原点は、自分の製作活動のなかで感じた問題点を解消したいという想い。そこから、世の中に対しても何か新しい提案をしていければと考えています」。

※プログラムのソースコードやファイルをクラウド上で保存・共有し、複数人で共同開発ができる世界最大級のソフトウェア開発プラットフォーム

Japan Leather Award gold 2026

フットウェア部門
ベストプロダクト賞



日本の夏に寄り添う快適性と上質さを両立した革サンダル

Title
[5cmヒールアップグルカサンダル]

「気温も湿度も高い日本の夏に、気持ちよく履いてもらえる革靴をつくりたい。そんな長年の想いが、この作品づくりのきっかけでした」

北嶋製靴工業所・代表の北嶋浩治さんはそう話す。1961年の創業以来、同社はフォーマルな紳士靴づくりを得意としてきた。しかし、夏場に売り上げが伸び悩むのが毎年の課題。何か解決策はないかと数年にわたりサンプルをつくり続け、ようやく形になったのが今回の革サンダルだ。

「レザーのストラップを編み込んだような、サンダルと革靴の中間に位置するデザインの『グルカサンダル』をベースにしました。甲に設けた隙間から風が通ることで、蒸し暑い季節も快適。かつ、つま先とかかとを覆う構造なので、一般的なサンダルよりもホールド感があって歩きやすいのも特徴です」

カジュアルに振りすぎず、紳士靴のシルエットを保ちながら、通気性を確保した構造がポイント。オフスタイルはもちろん、スーツにも合わせることができそうだ。

「通気性を上げるために、部分的に布地や冷感素材も試してみました。でも耐久性や、見た目の上品さを考えると、やっぱり革に勝るものはなかったんですよね。革が持つ天然の特性が、結局は一番優れているのではないか、革の本来のよさをもっと信じるべきなのでは、という結論にたどりつきました」。

Material

姫路のタンナーによるソフト牛革を使用。自然素材ならではの吸湿性や伸縮性に加え、足全体を包み込むやわらかな履き心地が魅力。表面にはシボと呼ばれる細かな凹凸があり、光が当たったときに立体的な陰影が出る。



Design

カジュアルに振りすぎず、紳士靴のシルエットを保ちながら、通気性を確保した構造。革の上質感を生かしつつ、機能性も担保するデザインを模索した。革素材の種類と開口部のバランスを、数年にわたって検討したという。



Detail

北嶋製靴工業所が50年以上つくり続けている主力商品、ヒールアップシューズの技術を採用。「本作品も、履いていただくことで無理なくスタイルアップし、気分も自信も高めてもらえるような靴にしたいと考えました」





Profile

北嶋 浩治さん

Affiliation

北嶋製靴工業所

父である先代・北嶋義盛氏のあとを継ぎ、2016年、北嶋製靴工業所・代表に就任。現職。ビジネスシューズやブライダルシューズなど、主に革製の紳士靴を製造。独自のインソールを取り入れたヒールアップシューズも人気。
自身はレザーソムリエ、シューフィッター資格も持つ。

受賞者動画を配信中！

購入はこちらから

Japan Leather Award gold 2026

フットウェア部門
フューチャーデザイン賞



猫の造形を凝縮“日常使いのアートピース”

Title
[歩く、即、猫。]

「歩く、即、猫。」

小嶋英揮さんの受賞作品は、まさにそのタイトル通りだ。4本のふくよかな指にはシルバーの爪が光り、それを履いて歩く者は、途端に二足歩行の猫となる。

「猫が好きなんです。神様が与えたあのしなやかな曲線美を、どうにか作品に落とし込みたいと考えました。構想段階では、猫の手の写真集を購入したり、猫を飼っている友人から画像を送ってもらったり。その造形を徹底的に研究するところから始めました」

素材として採用したのは、ベビーカーフ。生後3か月以内の子牛の革で、きめ細かさが特徴だ。

「履き心地を考えたらやわらかい革がいいのですが、以前ブーツをつくったときに使った輸入素材は、やわらかすぎてへたってしまう印象がありました。その点、今回使った国産のベビーカーフは、やわらかいけれど芯がある。しかも、高品質ながらリーズナブルでした」

このベビーカーフを、木型に沿わせて釣り込んでいく。猫の手の造形が複雑なため、通常の靴づくりに比べるとかなり多くの釘を、細かな間隔で打ち込んでいった。

「指1本1本をしっかりと固定するためにアッパー（甲革）とライニング（裏地）を一緒に釣り込む方法をとりました。構造が複雑なので、一般的な靴づくりよりも手間も時間もかかりました」。

Structure

猫の手を表現するためには、指の分かれ目を再現しなければならない。ジュエリーの彫金が専門である小嶋さんの工房には切削用工具がひと通りそろっていたこともあり、猫の手の木型を削りだすところから製作を開始した。



Craft

靴底前方には肉球のモチーフが。すり減ってデザインが摩耗してしまわないよう、真鍮のパーツを埋め込んである。地面に接することのないヒールでせりあがった部分は、削れる心配がないため、焼き印で肉球をあしらった。



Detail

猫の身体のライン特有のくびれをヒールの形で表現。理想のデザインを突き詰めつつ、ヒール高は5cmにこだわった。見た目としてはもう少し高いほうが美しいと小嶋さんは考えるが、無理なく歩ける機能性と安全性を優先。





Profile

小嶋 英揮さん

Affiliation

個人

シルバーアクセサリーを自分でつくれるようになりたいと考え、ヒコ・みづのジュエリーカレッジ入学。卒業後、複数のジュエリー製造会社で経験を積み、2015年、現在も勤めるジュエリーリペア工房に入社。
2018年より製靴を学び始める。2020年、自身のブランド「K_H」をスタート。

受賞者動画を配信中！

製作依頼はこちらから

Japan Leather Award gold 2026

バッグ部門
ベストプロダクト賞



柿渋染め鹿皮紙の魅力を存分に味わうミニマルバッグ

Title
[鹿皮紙(黒)バッグ]

「素材の美しさを見てほしかったので、デザインはとことんシンプルに仕上げました」

「shujiworks手縫い革教室」で講師を務める福島ゆかこさんは、受賞作品を前にそう話す。今回、主役に据えられたのは、鹿皮紙(しかひし)。西洋の羊皮紙(ようひし)から着想を得て、個体数調整されているニホンジカの皮を利活用してつくられた素材だ。

「教室の主宰・カワダシュウジが、2015年に立ち上げた『鹿皮紙プロジェクト』。この取り組みのなかで開発した鹿皮紙を使用しています」

今年のジャパンレザーアワードでは、カワダさんも「フリー部門:ベストプロダクト賞」を獲得。ふたり同時の受賞となった。

「この黒色は、柿渋でなめしてから鉄を反応させて染めたものです。カワダが初めてサンプルを見せてくれたとき、純粋に、めちゃくちゃかっこいい！ って思いました」

柿渋とは、熟す前の青い渋柿の果汁を搾り、発酵、熟成させてつくるもの。伝統的に、塗料や防腐剤として使われてきた。今回使用した黒鹿皮紙ならではの魅力的なムラ感は、この柿渋と鉄の天然染料だからこそ出せた色合いだ。この、均一な色ではない独特の発色が、福島さんの心をつかんだ。

「鹿皮紙の魅力を、ちゃんと伝えられる作品をつくらなくてはと、ある意味プレッシャーでした。受賞できてすごくほっとしています」。

Material

揺らぐような魅力的な黒は、柿渋を使用していることに加え、原皮の質や厚さの不均一性にも由来。バッグとしての実用性を考えて裏貼りにすることで、ハリや厚さのバランスを調整し、型崩れを防ぐこともできるという。



Structure

構造は、パーツに折り目をつけ、のりで接着しながら組み立てていくというシンプルなもの。「先々に商品化すると考えて、これまでもお付き合いがある就労支援事業所の利用者の方につくってもらうことも想定しました」



Craft

「私は、使い心地もデザインの一部だと考えています。持ったときの感触や経年変化を考えて、持ち手には牛革を選びました。結果、使い心地のいい、私の好きなバランスのバッグができあがりました」





Profile

福島 ゆかこさん

Affiliation

shujiworks手縫い革教室

「shujiworks手縫い革教室」講師。祖母の影響で、小学生のときに洋裁を始める。大学の服飾専門課程を卒業後、舞台衣装製作会社などでの勤務を経て、2011年「shujiworks手縫い革教室」に生徒として通い始める。
2016年、同教室の講師として勤務を開始。鹿皮紙造花の創作活動なども。

受賞者動画を配信中！

お問合せはこちらから

Japan Leather Award gold 2026

バッグ部門
フューチャーデザイン賞



捨てられるはずの端切れ革をつなぎいのちを吹き込む

Title
[ひとはだ]

捨てられるはずだった革の端材を生かし、アップサイクルなバッグを完成させたまこと工房の堀井誠さん。タンナーで縁裁ちの様子を見ているときにアイデアが浮かび、そのイメージを具現化した。

革のパーツを並べる際は、一枚一枚の表情を見せることに主眼を置きつつ、そのときの直感でランダムに配置。縫製においても、直線を縫うことが鉄則である職人に対し、「既成概念にとらわれずステッチを走らせてほしい」と依頼した。

堀井さんが自らに課したテーマは、常識を取り払うこと。「ひとはだ」には、設計図や仕様書が存在しない。どこかで働く「ちゃんとしなければ」という意識の壁を乗り越えた結果、いのちのかけらが躍動しているかのような力強さを感じさせる作品が完成した。

ラム革の端材を提供しているタンナー、T.M.Y's の渡邊守夫さんも「堀井さんの発想力には驚かされます。このバッグにはいのちが凝縮されている」と舌を巻く。

堀井さんは「ものづくりの現場で廃材をうまく活用できれば、資源を過剰に使わなくて済むようになりますし、そんな世界が求められている気がします。これからもフラットな視点でいのちや素材と向き合い続けていきたいです」と、未来を見据える。「ひとはだ」は、地球をすり減らすことのない新たなものづくりのベクトルにおけるひとつの解である。

Idea

縁裁ちによって革から切り落とされ、廃棄予定だった端材を使用。「革の中心部は価値あるもの、端は価値なきもの」という価値観を一度解体し、端切れ革を縫い合わせる職人技によって新たないのちを吹き込んでいる。



Craft

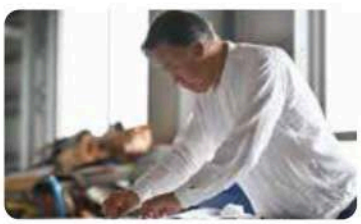
バッグには、およそ300のパーツを使用。堀井さん自身が端切れのかたちを一枚ずつ見ながら、2時間ほどかけてランダムに並べていく。銀面と床面の割合は8:2。ところどころに配置されている床面がアクセントになっている。



Detail

縫い合わせは知己の縫製職人が担当。ひとつのピースに対し、必ずステッチが乗るようにしている。また、重ね合う部分の段差がほつれてしまうという壁もクリアしている。直線と曲線が入り混じる自由さが魅力だ。





Profile
堀井 誠さん

Affiliation
まこと工房 & 有限会社T.M.Y's

堀井誠さんの肩書は、レザーディレクター、ブリコルール。
家業のバッグメーカーで働いたのち独立。
現在は徳島県に移住し、藍の栽培に携わっている。
レザーアワードへの作品応募は今回が初となる。

受賞者動画を配信中！

お問合せはこちらから

Japan Leather Award gold 2026

ウェア&グッズ部門
フューチャーデザイン賞



心躍るギミックと実用性を両立させたお財布バッグ

Title
[《KUROMUJI》]

一見した限りでは、黒い革製の地球儀。その実態は、遊び心あふれる「お財布バッグ」である。

「最近のお財布は、よりシンプルに、より小さく、というトレンドがあります。あえてその逆をいくおもしろさを狙ってみました」

地球儀のように見える形態は、保管しているときの状態。使用する際は、まず、バッグ本体である真ん中の球体を、軸から取り外す。紙風船のように組み立てられた球体は、一箇所がマグネットで開閉可能となっており、そこを開くと、小さなハンドバッグ。さらにその中にお財布が格納されている。通常私たちは財布を鞄に入れたり、ポケットにしまったり、何かしらもう一層の中に入れることで持ち運んでいる。ならば、財布自体に外郭をつくることで、単体でも成立するアイテムに昇華させようというのが、野沢さんのアイデアだ。

本体に使用したのは、0.3mmの極薄に仕上げた牛革。球体を折りたたんで持ち手にするという構造上、薄さが最重要事項だった。

「しなやかさとやわらかさがあるので、動作もスムーズ。繰り返しの使用に耐える強度もあります」

野沢さんはこの革で12枚のパーツをつくり、それをつなぎ合わせることで球体をつくりあげた。

「この革があったからこそ今回の作品が完成した。そう言っても過言ではないと思っています」。

Structure

球体を開くと、小さなハンドバッグが。その中に財布が格納されている。脇には、現代生活に欠かせないスマホを収納できるポケットも。「暗いシーンでも見えやすいよう、お財布部分のレザーは明るめのブラウンにしました」



Idea

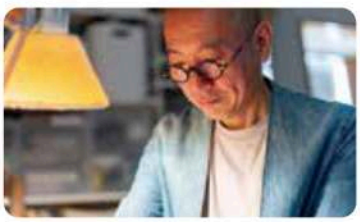
球体の構造を開いて周囲をぐるりと一周させるように折りたためば、バッグの持ち手に早変わりする。「最初の発想は、お財布の周りを何かで囲んで、それがパカッと割れたらおもしろいなっていう、単純な興味でした」



Option

ストラップをつければ、球体のままでもバッグとして持ち運べる。「提灯を下げて歩いているような姿になるので、これも懐古的でおもしろいかな、と。この形態で平置きしたときの佇まいにも、また違う趣があります」





Profile

野沢 浩道さん

Affiliation

個人

レザーアーティスト。歯科医師。2010年ころから余暇の時間でものづくりを始め、創作活動を展開する。ジャパンレザーアワードでは、2016年生活雑貨部門 部門賞、2022年グランプリ、2023年フリー部門 フューチャーデザイン賞、2025年バッグ部門 ベストプロダクト賞受賞。

受賞者動画を配信中！

製作依頼はこちらから

Japan Leather Award gold 2026

フリー部門
ベストプロダクト賞



新素材「鹿皮紙」やわらかな透光性をランプに生かす

Title
[鹿皮紙のペンダントライト＆スタンド]

羊や山羊などの動物の皮を石灰液に漬け、伸ばして乾燥、研磨することで紙のように薄く仕上げた素材、「羊皮紙(ようひし)」。古くから筆写素材として利用され、植物由来の紙の元祖であるパピルスに代わる素材として発展したと言われている。名前に「羊」を冠するが、原皮は羊・山羊に限らず、その土地の暮らしに根差した様々な動物の皮を原料とすることが特徴だ。

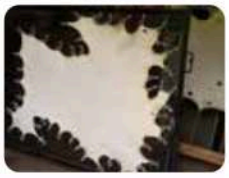
「日本では近年、野生の鹿の増加が問題になっています。森林生態系への影響に伴い、毎年多くの鹿が個体数管理のために捕獲されていますが、その多くは未利用のまま廃棄されているのが現状です。そこで、この未利用資源である鹿皮に新たな価値を見出し、日本の皮革技術と羊皮紙製造技術を応用した新素材『鹿皮紙(しかひし)』の製造を目指そうと、2015年に『鹿皮紙プロジェクト』を立ち上げました」

鹿皮紙の特徴のひとつは、鹿皮自体がもつ透光性。独特のやわらかな光が得られるのではと、カワダさんは鹿皮紙を使った照明器具の開発に取り組んできた。

「気温も湿度も大きく変化する日本の四季のなかでも、歪みが生じることなく安定的に使用することができるか、3年ほど実際に使い、検証。やっと今年、出品できる品質になったと確信しました。協力いただいた方々に、ようやくひとつ恩返しができた気分です」。

Material

鹿皮の特性を生かした鹿皮紙素材を目指し、試作を重ねながら開発を進めた。丸みを帯びたランプシェードは内外周の差によってシワが生じやすく、安定した再現性をもつ素材づくりには8〜9年の歳月を要したという。



Craft

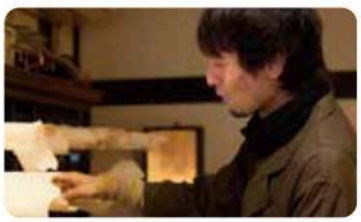
万が一変形しても、簡単に形を直せることが大きな利点。「鹿皮紙を一度水で濡らし、型に沿わせて釣り込むことで成形。そこから乾燥させることで形を固定するのですが、もう一度湿らせれば再成形できるのが特徴です」



Detail

ランプシェードには、照明用に特化して、鹿皮がもつ透光性をより引き出した鹿皮紙を使用。個体差によるニュアンスの違いが光を通すことで美しく浮かび上がり、独特の表情を楽しむことができる。





Profile

カワダ シュウジさん

Affiliation

shujiworks手縫い革教室

2010年より、「shujiworks手縫い革教室」主宰。
レザークラフトのほか、木工や彫金の技術も用いて創作活動を展開。2015年、「鹿皮紙プロジェクト」始動、狩猟免許取得。2021年、鹿皮羊皮紙の製造方法特許取得。
2023年、ショールーム「鹿皮紙と無花果」を、東京・青梅にオープン。

受賞者動画を配信中！

お問合せはこちらから

Japan Leather Award gold 2026

フリー部門
ベストプロダクト賞



革のしなやかさとガジェットの硬質さを融合したキーキャップ

Title
[レザーキーキャップ]

革のしなやかさとガジェットの硬質さを融合し、自作キーボード愛用者の心をくすぐるレザーキーキャップが誕生した。廣野航平さんは、革とガジェットをこよなく愛するクリエイター。無駄を削ぎ落とした機能美こそ美しいという信念を持つ。

完成形として目指したのは、使い心地とデザイン性の両立だ。素材には厚さ1mmのタンニンなめし革を採用し、エッジの効いた直線的なラインを追求。キーキャップの形状は、指なじみを考え、くぼむようにカーブを描くシリンドリカル形状に。土台は3Dプリンターで成形したパーツを使い、革を濡らしてなじませるウェットフォーミング技法で成形。タイピング時には目に見えない部分にまで気を配り、3Dプリントの土台と革を一体化させている。

実際にレザーキーキャップを使い始めてみたところ、「プラスチック製のキーキャップ使用時に、微細なストレスを感じていたことに気づきました」と廣野さん。革という天然素材が、タイピングする指を受容するなめらかさを持つことの証左だ。「自作キーボードはカスタマイズ、革製品はエイジングによって『育てる』楽しみが共通しています。両方のファンに使ってほしいですね」

革を用いたシンプルな形状だからこそ味わえる、自分だけのツールを育てる喜び。レザーキーキャップは、多くのPCユーザーの指先を魅了していきそうだ。

Idea

革が好き。ガジェットも好き。そんな廣野さんがひらめいたのは、レザーを使用したキーキャップ。素材には経年変化が楽しめるタンニンなめし革を使用。革の厚みを1mmにしてガジェットらしい硬質さを演出している。



Craft

裁断した革をお湯に浸してやわらかくしたあと、水分を拭き取りすぐに床面に接着剤を塗布。3Dプリンターで成形したパーツとともに型へ押し込む「ウェットフォーミング」は、スナップフィット構造で工程を簡略化。



Detail

3Dプリンターでつくった土台と革のつなぎ目の境界がなじむよう、革の吊り余った部分をカットする。その後の工程を左右するため、集中してまっすぐ刃を入れるのがポイント。仕上げへのこだわりに美意識が息づいている。





Profile
廣野 航平さん

Affiliation
yuitsu（唯一）

2026年初頭よりレザーキーキャップの製作をスタート。
オリジナルブランド「yuitsu（唯一）」を立ち上げ、
オンラインショップでレザーキーキャップを販売している。
普段の顔は、ゲーム会社にてバックエンド管理を担当するプログラマー。

受賞者動画を配信中！

購入はこちらから

Japan Leather Award gold 2026

フリー部門
フューチャーデザイン賞



革の振動で迫力の重低音を実現 独創的スピーカー

Title
［Percussion Resonance］

革の振動によりパワフルな音を生み出すヘッドフォンで、2025年のグランプリを受賞したウエダトモユキさん。今年は、同じく革の性能を利用したスピーカーで、フリー部門フューチャーデザイン賞に選ばれた。

「スピーカーの中には、内部の空気の動きを受けて受動板を振動させることで、低音を補強する仕組みをもつものがあります。この仕組みを採用すると、小型のスピーカーでも、迫力のある低音を出すことが可能。この構造には通常ゴムが使われるのですが、これを革で仕上げたのが今回の作品です」

思い通りの音を出すために、受動板の形状にとことんこだわった。

「型は、3Dプリンターでつくっています。複雑な構造も正確に形にすることができるので助かります」

革は、牛のタンニンなめし、1.2mmのものを使用。

「厚さや動物の種類によって、通気性など特性が異なります。いろいろ試した結果、丈夫さと通気性のバランスで牛革がベストでした」

デザインにおいては、パソコンデスクに置いたときに映えるフォルムになるよう検討を重ねた。

「友人に、デスク周りのガジェットに凝っている人が多くいます。キャノン砲のようなイメージで、ぱっと見ただけで『これはおもしろい音が出そう！ と思ってもらえるビジュアルを目指しました」。

Craft

受動板の成形には、濡らした革を型に押しつける、ウェットフォーミングという技法を用いた。スピーカーの側面に露出するデザインでもあるため、革であれば使い込むほどに見た目の経年変化も楽しめる。



Detail

内部に重くて硬い板を仕込んでいることも、理想の音を出すための工夫。革全体が振動すると、こもってごわついた音になってしまうため、円盤を入れて受動板全体を上下に動かすことで、クリアでパワフルな低音を実現。



Design

ボルトは、あえて鏡面ステンレスのものを。目立たせることで、デザインの一部として成立させている。「ボルトの締め方によって革の張り方を調整して音色を加減する構造は、太鼓やドラムと同じ。そこも意識しました」





Profile

ウエダ トモユキさん

Affiliation

TOMOWORKS

2022年より自身のブランド「TOMOWORKS」主宰。
家族全員がデザイナーという一家に生まれ育ち、幼いころからものづくりに没頭。
美術系の高校、大学を卒業後、プロダクトデザイナー職に就く。
本業の傍ら、3Dプリンターと革素材を使ったオーディオ機器を中心に創作活動を展開。

受賞者動画を配信中！

購入はこちらから

Japan Leather Award gold 2026

アーティスティックデザイン賞



織部焼に着想を得た歪みや不均一の美“考えながらつくる靴”

Title

[手で考える靴—織部]

「今回の作品は、1600年代初頭に生まれた焼きもの、織部焼からアイデアを得ました。工房から徒歩10分のところに興聖寺というお寺があるのですが、またの名を、織部寺。昨年、ちょうど期間限定でお茶席が設けられると聞き、いいチャンスだと訪れてみました」

供されるのは、もちろん織部焼の器。そこで初めて、織部焼のすばらしさを実感することとなる。

「じつは、靴づくりの修行時代にアルバイトをしていた豆腐料理店で、織部焼の器を使っていたんです。でも形も不均一だし、文様も斬新。そのときは、恥ずかしながらよさがわからなかったんですよね」

若いころには理解できなかった織部焼の魅力。自由な発想と枠にとらわれない独創性を、三上さんは靴に取り入れようと創作を始める。ただ、あらかじめすべてを決めてからスタートするのではなかった。「手を動かして、手で考えて、つくる靴」。本作品の紹介文で、三上さんはそんな言葉を用いている。

「革の厚みや繊維の向き、手で触れるからこそわかる素材の持つ性質。染料の濃度や塗り加減も、作業しながらだからこそ見えてくるデザインの幅があります。こうした素材の反応を感じとることで、その先の展開が自ずと決まっていく。言葉ではうまく表現できない、思考を飛び越えて手が動くような、初体験のものづくりでした」。

Structure

「履き心地は左右均等に仕上げつつも、見た目にあえての歪みや崩れを取り込む。ここにも、織部焼からヒントを得た不均一の美学を落とし込んでいます。木型の上に何度も試し描きをして、型紙の形を決めていきました」



Color

革の上で織部焼らしい色合いを実現するために、皮革染料と絵画用の色材をブレンド。染めた緑は、革を伸ばすとその色合いが変わるため、釣り込み作業後の色を確認したうえで、最後にもう一度、緑色の染料を重ねている。



Detail

鉄絵を模した文様部分も、成形前に描いたものと、あとから描いたものの2種類がある。「織部焼に見られる、花や草など自然をモチーフにした反復模様。これを、全体のバランスを見ながら絵付けしていきました」





Profile

三上 良弘さん

Affiliation

株式会社ネーカーズ

株式会社ネーカーズ・代表取締役。
大阪の老舗製靴店「コバヤシ靴店」にて14年間修業。暖簾分けを受け、2011年、京都で「コバヤシ靴店　三上工房」を立ち上げる。オーダー紳士靴のほか、障がい者用靴「TONE」、コラボ・スニーカー「Tie a bond」、革製筆記具「penmode」を展開。

受賞者動画を配信中！

製作依頼はこちらから

REVIEW



グランプリ：学生部門 最優秀賞 /「LEATHER CELL VEST（レザーセルベスト）」

3Dプリンター技法と皮革素材とのコラボは10年ほど前から様々に提案されてきたが、これほど秀逸なデザイン提案はなかった。学生作品が大賞に輝いたのはレザーアワード史の中で初である。ここ数年、学生作品のレベルアップは感じていたが（今年も力作揃いである）、とても喜ばしいことである。社会構造が毎年変化する中で、伝統のしがらみから抜け出して、変化を受け入れる柔軟な姿勢は重要である。例えばこの提案には、皮革素材の可塑性のある自由な材料特性が、裁断し縫製する従来の製造方法だけでは、いわば“片肺”であり、まだまだ手付かずの新しい手法があることを導いてくれる。熟練の技と未成熟な視点の共創は皮革産業の発展には不可欠である。



フットウェア部門：ベストプロダクト賞 /「5cmヒールアップ グルカサンダル」

日本人の感性という、表現が難しい精神性に真剣に取り組まれたことが、審査員の評価が集まった理由ではないか。通常、サンダルを連想するこうした夏靴は中途半端にカジュアルになりがちだが、この製品はサンダルという記号から逸脱し、日本の気候や文化から生まれた日本の革靴の原点を感じさせてくれる。日本文化の研究などつくる以前の取り組みが、この製品デザインには生きている。



フットウェア部門：フューチャーデザイン賞 /「歩く、即、猫。」

世界が認める日本のキャラクターやアニメカルチャーなどは、革製品開発において格好のテーマになるだろうと思っていたが、その世界を堂々と、しかも気を衒わず、正統につくり上げる逸品に出会えた。爪を表現したシルバーパーツや中敷の肉球表現など、遊び心がないとここまではできない。それでいてコスプレを否定し、あくまで日常で、という作者の真面目さがとてもよい。



バッグ部門：ベストプロダクト賞 /「鹿皮紙（黒）バッグ」

素晴らしい取り組みで審査員一同感銘を受けた。「鹿皮紙」の上質かつモダンな質感が、新しい表情をつくり上げ、大変美しいバッグである。革製品はどうしても素材の野性味が先に立ち、なかなか暮らしに浸透しにくい面があるが、この作品にはその欠点がない。しかし、実際に手で持って使っていると、じんわりと皮革素材の温かな肌感を感じることができる。クールでいてワイルド。面白い世界が広がっていきそうだ。



バッグ部門：フューチャーデザイン賞 /「ひとはだ」

やや意図的で高揚感が足りないアップサイクル品とは異なり、自然に生まれたかのような造形が目を引いた。残り物には福があるではないが、端素材には豊かな表情につながる不規則な魅力があることを改めて知ることができた。裁断されたものでは難しい。デザインという設計行為では成し得ない、こうしたブリコラージュ※の手法は、革製品の未来にはとても有効であることをこの作品は示している。

※ブリコラージュ：あらかじめ設計された材料を用いるのではなく、手元にある素材や既存の要素を生かし、その組み合わせから新たな形や価値を生み出す製作手法・考え方。



ウェア&グッズ部門：フューチャーデザイン賞 /《KUROMUJI》

作者の世を達観した眼差し（教養）がこの作品に溢れていて、審査員の多くが感銘を受けた。球体の造形にはモノが持つ方向性（記号性や機能性など）をなくす意図を感じる。プロの皮革産業従事者とは異なる、私的とも言えるデザインアプローチが、独自の“粋”な表現を生み出している。作者の独特な立ち位置は、一点ものを得意とし、大きな市場とは別の活路を模索するこれからの皮革業界においてはとても意義深いものと思う。消費者ではなく“人”のためのデザイン。革製品の魅力は、そこにある。



フリー部門：ベストプロダクト賞 /「鹿皮紙のペンダントライト&スタンド」

バッグ部門のベストプロダクト賞に輝いた鹿皮紙のバッグ同様、皮革素材の可能性を広げる提案に審査員の票が集まった。ガラスや樹脂製に比べ素朴な素材感は、懐かしさと新しさが共存する不思議な世界観をつくりだしている。透過性をもつペンダント部分と台の部分とでは皮革素材の表情は異なるが、同一素材としての一体感があり、作者のこだわりを感じる。欧米からの観光客が増加する中、例えばゲストハウスなど、日本の簡素なおもてなし空間にマッチする秀逸なデザインである。



フリー部門：ベストプロダクト賞 /「レザーキーキャップ」

人間の指先は高感度なセンサーであり、このレザーキーキャップの使用感は使えば使うほど離れられないものとなるのではないか。審査のわずかな時間でさえも、樹脂製とは違う暖かさやわずかな弾力を感じた。皮革素材の特性、そのポテンシャルを我々はまだ半分も理解していないように思う。今後この提案のように皮革素材の、これまで思いもよらなかった製品への応用を期待したい。



フリー部門：フューチャーデザイン賞 /「Percussion Resonance」

この製品も、フリー部門のベストプロダクト賞を受賞した「レザーキーキャップ」同様、皮革素材の未来、ポテンシャルの高さを感じさせる提案で、昨年の「革張りで音が変わるヘッドホン」に続く受賞となった。タンニンなめし革をウェットフォーミング成形し、低音を引き出すなど、皮革素材の可能性はまだまだ未知である。革が新しい音づくりに寄与することをはじめ、素材の持つオルタナティブな機能性を各地域の工業技術センターなどの協力を得て再考し、広く共有できる公開データとして蓄積していくことが、今後望まれる。



アーティスティックデザイン賞 /「手で考える靴 — 織部」

「手で考える。頭で描いた図面通りにつくるのではなく、革の反応を指先で受け取りながら形を決めていく」こうした“つくる喜び”が原点にある革靴である。大名茶人・古田織部の好みでつくられた、囚われないデザインで知られる織部焼から影響を受けた作者のコンセプトは、まさに革靴の常識から脱却している。非対称で歪みがあり、かつ手書き調の図案が、どこにもない独特な世界観を生み出すことに成功している。それは、西洋的なものづくりから日本的なものづくりへのシフトと言えるのではないか。インバウンドの目にこのデザインはどう映るか。これからが楽しみなデザインが誕生した。

審査全体評

自由でオルタナティブな視点が醸す皮革デザイン

いわゆるマーケティングなどを駆使し、設計から製造、販売まで計画的に行う従来のアプローチはもはやこのレザーアワードでは見られない。言い方をかえればレザーアワードの出品者はその手法とは次元の違うやり方、もう一つ（オルタナティブ）の視点を模索している。そう思わせるくらい今年の応募提案には、自由で遊び心溢れるものが多く見られた。

私が審査員になった10年ほど前は、まだ市場を意識した提案が多かった。
問屋商売に洗脳されたかのような視野の狭い提案にため息が漏れたが、急な変化はまだ先と言い聞かせてきた。その流れが確実に変わったのだ。これは驚くべきことではないか。

それはモノづくり革命がレザーアワード周辺では脈々と起こってきたことを示している。皮革素材は3Dプリンターなどのデジタル技術と相性がよく、技術的（ハード）に幅が広がったことも奏功しているが、むしろ変化は精神的（ソフト）な側面へ波及しているのだ。日本全国の皮革職人、デザイナーの方々の社会構造の変化を見据えた、心技体のたゆまぬ創意工夫には頭がさがる。

こうした動きをあえて例えるとすれば、江戸中後期に萌芽した与謝蕪村や池大雅に代表される文人画（南画）の世界観と近いように思う。狩野派など朝廷に仕える職業画家（北画）にはない自由な手法は、詩と絵画の融合など、その後の芸術文化を醸成、成熟させた。日本文化のレベルを上げ、趣味人など豊かな生活者を生み出してきた。

今、レザーアワードで起こっているこのオルタナティブな視点も、新たな皮革産業の扉を開け、日本の革製品のレベルを一段押し上げるだろう。長らく続いた西洋スタイルとは違う日本独自のスタイルが生まれる土壌は出来上がった。

そのこだわり（オタク的）から生まれる魅力は、アニメや漫画文化同様、国内外の多くの人々から注目され、これまでにない皮革文化をつくり出していくのではないだろうか。

［審査員長］



長濱 雅彦 NAGAHAMA Masahiko

東京藝術大学美術学部教授／専門はプロダクトデザイン。日経デザイン記者を経て長濱デザインオフィス設立。グッドデザイン賞、KSP賞、イエローペンシルなど受賞多数。近年は次世代の生活支援ロボットのデザイン研究などを行っている。

［審査員］（あいうえお順）



有働 幸司 UDO Koji

ファッションデザイナー。東京モード学園卒業後、株式会社BEAMS入社。退社後ロンドンに留学。帰国後、国内ブランドの立上げに参加。その後独立し、FACTOTUMをスタートさせる。現在、モード学園の特別講師も務める。



中山 路子 NAKAYAMA Michiko

東京都出身。服飾学校を卒業後、アパレルメーカーに勤務。2002年「モスライト（MOSSLIGHT）」の設立に参画し、2006年春夏コレクションより海外に進出。2007年春夏モスライト解散後、2007-2008年秋冬より「ミュベール（MUVEIL）」をスタート。



廣田 尚子 HIROTA Naoko

デザインディレクター／ヒロタデザインスタジオ代表／女子美術大学教授。ビジネスデザインを立脚点に企業戦略・インナーブランディング・プロダクトデザインまでを総合的に手がける。RED DOT DESIGN AWARD、IF Design賞、グッドデザイン賞他受賞多数。



政近 準子 MASACHIKA Junko

パーソナルスタイリスト創始者。東京スタイル（デザイナー）を経てイタリアへ移住。帰国後に個人向けスタイリングサービスを提供する「ファッションレスキュー」を設立。政治家、経営者、企業管理職、起業家などの富裕層を主に顧客に持つ。著書12冊。



山田 菜々子 YAMADA Nanako

東京藝術大学准教授／空間設計・施工会社での実務、多摩美術大学テキスタイルデザイン専攻専任講師等を経る。染織分野を基盤に、素材の特性と制作技法に深い知見を持ち、作品制作、教育、国際交流展をはじめとする展示活動を通じて、ものづくりの可能性を多面的に探究している。



若杉 浩一 WAKASUGI Koichi

プロダクトデザイナー／インテリアデザイナー／ソーシャルデザイナー。武蔵野美術大学、クリエイティブイノベーション学科教授に2019年4月より着任。1959年熊本県天草市生まれ。九州芸術工科大学工業設計学科卒業。

2つのカテゴリーで評価

ベストプロダクト



日常生活で使用する革製品で、優れた「デザイン力」と、量産品質が確保された「商品力」のある作品

フューチャーデザイン



革素材を使用し、今までにない「新規性」が表現されたデザインや機能を提案する作品